大太鼓を奉納し五穀豊穣を祈願

7月14・15日 八幡宮綴子神社例大祭

地域一丸で七百年の伝統を受け継ぐ

「大太鼓祭り」として知られている八幡宮綴子神社（武内尊英宮司）の例大祭が7月14日（宵宮）と15日（本祭り）の2日間、同地区で行われ、当番町の上町が、直径3・80mの大太鼓をはじめ3張りの大太鼓、また獅子踊りや奴踊りなどの郷土芸能を同神社に奉納、五穀豊穣を祈願しました。

お祭りは、雨乞いと日和上げの神事として今から約700年前の弘長2年（西暦1262年）頃から始まったと伝えられ、徳川方と豊臣方に分かれた上町・下町の両集落が一年交代で奉納行事の当番町を務めます。↘

「綴子の大太鼓」は、昭和54年12月、「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」（国記録選択）に指定。大太鼓は綴子の大太鼓の館に展示されているほか、お祭りの様子は館内の映像でご覧になれます。

↙本祭りの15日は、取り仕切り役の露払い太夫と「ヤツパリ」といわれる棒術の使い手を先頭に団旗、陣旗、豊年旗、槍や鋏箱を持った奴、裃に陣笠姿の侍など100人あまりの出陣行列が上町集落の北側を午前11時過ぎに出発、3張りの大太鼓を打ち鳴らしながら綴子神社に向かい、地元の人たちや観光客が見守る境内で奉納行事を行いました。

境内では、祭りの由来を語る太夫の口上で始まり、躍動感にあふれた獅子踊り、子供会と青年会の奴踊りなどの伝統芸能が次々と披露され、見物客から大きな拍手が送られていました。

奉納行事の前には、神社境内で作占い「湯立ての神事」が行われました。大鍋にお湯を沸騰させ、神職や氏子がワラの束でかきまわして立つ湯のしぶきの加減で作物の作況を判断します。武内宮司によると今年の作況は「豊作型。水不足の心配はあるが、作物が育つのには十分のよう」と占いの結果を説明しました。

◀左（奥）から直径3・80m、3・33m、2・61mの3張りの大太鼓。奉納行事は、かつては上町・下町両集落が合同で行っていましたが、奉納の先陣争いでけが人が出るほどでした。そのため昭和のはじめからは、両集落が一年交代で奉納することになり、今度は太鼓の大きさを競い合うようになりました。現在では両集落とも直径が4m近い巨大なものになっています。

◀奴踊り（子供会）の采配役・中奴

▼棒使いの妙技

▼悪疫や災難を払う神事舞「獅子踊り」

上町では、奴踊りは男の芸能。女の子は手踊りで伝統を支えます ▶

▼長襦袢（じゅばん）に紋入り腹掛け、化粧廻し姿で舞う奴踊り。「朝日（旭）山」「通り奴」「綾奴」など10以上の演目があり、祭りではそのうち8種類を披露しました

▶作占い・湯立の神事。今年は「豊作型」とのご託宣が出ました